

ナチスに抵抗した聖職者

ディートリッヒ・ボンヘッファー Dietrich Bonhoeffer¹

京都大学大学院教授 河崎 靖

1.

剣を取る者は皆剣によって滅びる（マタイ Matthäus 26 : 52）
„Wer das Schwert nimmt, der soll durchs Schwert umkommen.“

20世紀の神学者・牧師・思想家ボンヘッファーは、一般にはナチスへの抵抗者として記憶されています。ボンヘッファーが生きた時代は人類史上でも稀に見るほどの大殺戮が展開する時代でありました。その中でボンヘッファーは迎合も沈黙も拒否し、キリスト者として生きることを選んだのです。罪もない人びとが日々、大量に殺害される現実（例：ユダヤ人問題）を目の当たりにして、彼は現実の倫理的判断からキリスト者としての実践を決断しています。つまり、状況に応じて、危機に曝されている者や抑圧されている者を救い出すという行為です。ただし、これを行うことのできる前提に、上とのつながりがあります²。すなわち、キリストとのつながりです。「召し」がなければ、到底なし得ない行いであると思えてなりません。ボンヘッファーの生き方は、ある意味シンプルなのですが、あのような過酷な時代の中でなされた命懸けの思索の証なのであります。

皆さんの中には、コルベ（Kolbe）神父のことを思い出す方もいるでしょう。第二次大戦中にナチの強制収容所で自ら死んでいった聖職者であり、「無原罪の聖母の騎士修道院」を建てたマリア崇敬者のポーランド人神父です。母国ポーランドへ帰国後、ナチ思想に反する宣伝をやめないとして、ドイツ軍に逮捕され、アウシュビッツ収容所に送り込まれたが悠揚としていました。しかも、餓死刑を言い渡され、家族がいると泣き叫ぶ軍曹の身代わりを申し出て、ガス室よりはるかに残酷だと言われている地下牢で、死んでいった司祭です。この軍曹が収容所で解放されるまで生き延びたため、事情が明らかになりました。

1 本稿は、南山大学ヨーロッパ研究センター・外国部学部ドイツ学科主催講演会（2020年11月23日「ナチスに抵抗した人々」シリーズ第1回講演会「ナチスに抵抗した聖職者たち—プロテスタントを中心に—」）を基にまとめたものである。

2 高橋由典（2020 : 89）『続・社会学者、聖書を読む』教文館



ボンヘッファー

ボンヘッファーの時代の模様を、シュミット（1911年生まれ）というジャーナリスト（牧師の子として生まれ、フランクフルト大学・ハイデルベルク大学・ロストック大学で文学・宗教学を修める。ラジオ・テレビの教会問題解説者として主にフランクフルトで活躍）が次のように描いています。

Darf man überhaupt Soldat sein? Darf man, wenn man sich zu den Christen rechnet, einen anderen Menschen, einen anderen Christen töten-und sei es im Auftrage angeblich idealer Größen wie Volk, Vaterland und Heimat?

キリスト者は兵隊になりうるのだろうか、自分はキリスト者として、ほかの人間、特にほかのキリスト者を殺すことが許されるのだろうか—たとえそれが民族とか国家のためであっても。

2.

1930年、ボンヘッファーはアメリカのユニオン神学校（Union Theological Seminary）に留学するため渡米しましたが、この時の彼の心情を『ボンヘッファー伝』の著者ベートゲ（Bethge⁷1989: 183）は次のように記しています³。

3 Bethge, Eberhard (⁷1989, 1970) *Dietrich Bonhoeffer. Theologe-Christ-Zeitgenosse*. München: Chr. Kaiser Verlag. 『ボンヘッファー伝』第1～4巻（新教出版社）

Dietrich Bonhoeffer fuhr in sein letztes Jahr ungebundenen Lernens. Den Forderungen für eine berufliche Laufbahn sowohl auf akademischem wie auf kirchlichem Gebiet war mit glänzenden Resultaten Genüge getan. Weder dem Katheder noch der Kanzel hatte er sich endgültig verpflichtet. Nie vorher und nie nachher ist er so frei gewesen: das Nötige war geleistet, und alle Wege standen offen.

ディートリッヒ・ボンヘッファーは、何の束縛もなく勉強できる最後の年へと旅立った。大学の領域でも教会の領域でも、職務上の経歴のために要求されるさまざまな条件はすでに輝かしい成績をもって満たされていた。（大学の）教壇に対しても（教会の）説教壇に対しても彼は今いかなる義務も負っていなかった。こんなに自由であったことは、これまで一度もなかったし、この後もなかった。必要なことは済ませてしまっていたし、すべての道は開けていた⁴。

今日、ボンヘッファーが時に「殉教者」扱いされることがあるのも私にはもっともかと思われます。アメリカの神学者ニーバーは、1939年にボンヘッファーから受け取った手紙を引き合いに出し、当時のボンヘッファーの生の声を次のようであったと紹介しています：「アメリカに来たことは間違いであったという結論に達しました。私は、故国の歴史のこの困難な時期を、ドイツのキリスト者と共に生き抜かねばなりません。もし、この時代の試練を同胞と分かち合うことをしなければ、私は戦後のドイツにおけるキリスト教的生活の再建に参加する権利を失うことになるでしょう」。後に1954年ニーバーは、「キリスト教と危機」（Christianity and Crisis, 1954年6月23日）の中で、ボンヘッファーの死を悼み「ある殉教者の死」（The Death of a Martyr）という記事を書いています。

ボンヘッファーは2回渡米を経験していますが、戦況が厳しくなってきた2回目の渡米の折の思いは1回目の時とは大きく異なっています⁵。本当に母国のことを想うなら、決してドイツを離れてはいけなはずだという気持ちが日増しに強まってくるのです。いったんはニューヨークに来たものの1ヶ月ほどで帰国の決断をすること

4 村上伸（2012：58-59）『ボンヘッファー紀行 その足跡をたずねて』新教出版社

5 2回目の渡米はいわば亡命と言ってもいいかもしれない。宮田（2019：21）：「何よりも武器を手にする兵役を（…）拒否しなければならないという彼の信仰的確信と結びつくもの」（宮田光雄（2019）『ボンヘッファー 反ナチ抵抗者の生涯と思想』岩波現代文庫）



Hellmut Schlingensiepen氏が作成した「ボンヘッファー」の伝記的DVD

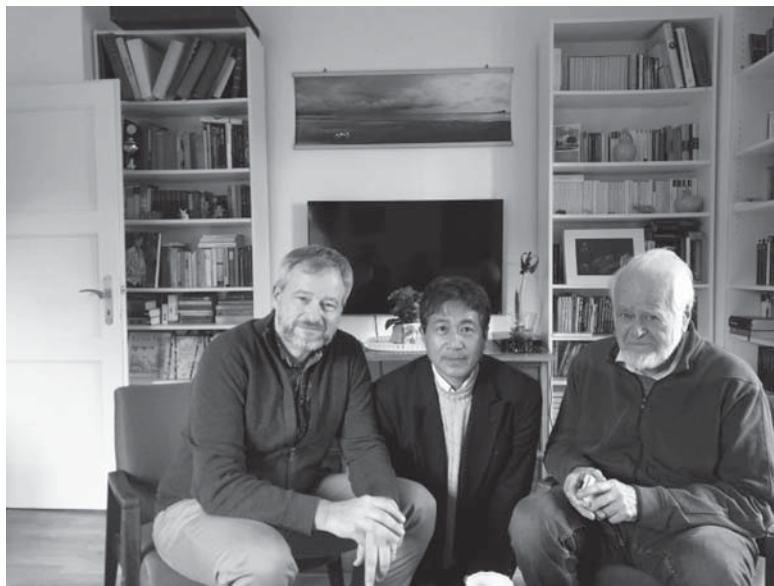
になります⁶。この時の思いを、ボンヘッファー研究家であるフェルディナント・シュリングエンジーベンFerdinand Schlingensiepen氏の構想をもとに、ご子息であるヘルムート・シュリングエンジーベンHellmut Schlingensiepen氏が映画化し、その臨場感あふれる描き方が注目を集めています。DVDのタイトルはWer glaubt, der flieht nicht. (2012年、IDEE und BILD社)といい、ボンヘッファーの生涯を伝記仕立てで映像化したものです⁷。

昨年(2020年3月)、シュリングエンジーベンSchlingensiepen父子のご自宅を訪問する機会がありました(ドイツのデュッセルドルフ)。その折、どうしても私が気になって仕方のなかった点についてお尋ねしました。それは、ボンヘッファーと闘牛という一見、意外な組み合わせに関してです。闘牛はボンヘッファー(バルセロナ時代)を魅了してやまなかったそうです。

フェルディナント・シュリングエンジーベン(Ferdinand Schlingensiepen)が答え

6 自責の念にかられアメリカからドイツへの帰国を決心したのは、何より彼がドイツ人だったからであり、家族をはじめ自国の同胞たちへの愛着からだったであろう。ヒトラーに愛を説こうとすることまで考えていたとは思われない。

7 このDVDタイトル名(Wer glaubt, der flieht nicht.「信仰のある者は逃げはしない」)の言い回しの元になった箇所が『聖書』にあり、それは「イザヤ書」28:16である(「信ずる者はあわてることはない」)。



右：ボンヘッファー研究者であるフェルディナント・シュリンゲンジーベン Ferdinand Schlingensiepen 先生。左：2019年に来日したご子息のヘルムート・シュリンゲンジーベン Hellmut Schlingensiepen 氏。真ん中が筆者。

て下さったのは以下の通りです：「闘牛士はいつか生死を分ける危機的瞬間⁸が自分の身にも襲いかかることを予感しており、この感覚がボンヘッファーを惹きつけたのではないか」と⁹。実に興味深い見解であります¹⁰。

8 村上（2012：56）では「真理の瞬間 Augenblick der Wahrheit」と表現されている（村上伸（2012）『ボンヘッファー紀行 その足跡をたずねて』新教出版社）

9 国際ボンヘッファー会議（1984年、東独のヒルシュルッフ）も参照のこと。

10 ボンヘッファーは両親宛ての手紙（1928年4月11日）で「闘牛」に関して次のように記している：
Ich hatte schon vorher mal eine gesehen und kann eigentlich nicht sagen, dass ich von der Sache so abgeschreckt wäre, wie viele Leute meinen, es ihrer mitteleuropäischen Zivilisation schuldig sein zu müssen. Es ist doch eine große Sache wilde ungehemmte Kraft und blinde Wut gegen disziplinierte Courage, Geistesgegenwart und Geschicklichkeit ankämpfen und unterliegen zu sehen [...] In dem Ganzen tobt sich ein gewaltiges Stück Leidenschaft bei den Leuten aus, in die man selbst mit hineingezogen wird. Ich denke, es ist kein Zufall, das im Lande des düstersten und schroffsten Katholizismus gerade der Stierkampf unausrottbar festsetzt. Hier ist der Rest uneingeschränkter, leidenschaftlichen Lebens und vielleicht ist es der Stierkampf, der, grade indem er die ganze Seele des Volkes in Aufwallung, ja zum Toben bringt, eine im übrigen Leben relativ hochsitastehende Sittlichkeit ermöglicht,

3.

反ナチスの闘士ボンヘッファーとその同時代人の文章は、キリスト教の知識と深い教養に裏打ちされながらも、現代的課題に真剣に向き合う、緊張感あふれる名文で、ドイツ語テキストとして切実なまでの完成度を誇る至上のテキストであります。いわば今日の私たちに迫ってくる文章と言えましょう。彼等のテキストは、ときに命がけで、遺書にもなる可能性を予感しながら書かれた「いのちのテキスト」でもあるからです。ボンヘッファー自身が残したことを、いくつか原典であるドイツ語で辿りながら、ボンヘッファーの思想・信仰・行動について明らかにしたいと思います。

ボンヘッファーは、インド独立運動化で非暴力主義者ガンジー (Mohandās Karamchand Gāndhī 1869-1948) の影響も受けていたと言われていています。時代の流れに逆らい、反ナチス運動で逮捕されてからも獄中から多くの書簡を書き¹¹、その言葉の数々は現代の私たちにも、良心に生きるとはいかなることかを問い続けています。さて、キリスト者・牧師でありながら、ボンヘッファーはどのような論理・倫理をもって、暴力や殺人をも許容するヒトラー暗殺・クーデタ計画に乗り出したのでしょうか。イエスの生き方を模範に人は生きる、このようにキリスト教は教えます。ただ、イエスの教えをしっかりと守り、これを行動原理とするのは、場合によってはかえってイエスを否定する行為になり得るのでしょうか。すなわち、ボンヘッファーが牧師の立場で十戒を破ること、「汝殺すなかれ」という掟を破ることが実はイエスの教えを守り、実践することを意味することになるのでしょうか？この問題を究めるためには、その決定的瞬間にまで至る途中のプロセスをボンヘッファー本人のテキストに則して検討

weil die Leidenschaft mit dem Stierkampf abgetötet wird, sodass die sonntägliche Corrida das notwendige Pedant zur sonntäglichen Messe wäre. Wenn ich ihn richtig verstehe, fasziniert ihn der Kampf zwischen blinder Wut und Disziplin. Außerdem überlegt er, ob die Leidenschaft der Besucher Ausgleich für den strengen Katholizismus in Spanien ist.

- 11 ベートゲ (2004: 10): 「その分量とは比較にならないほどの影響力を、現在の宗教思想に対して及ぼしてきた。しかも、彼の思想の多くのものが断片にとどまっていることを考えると、この影響力はいよいよもって驚くばかりである。Diese Seiten haben einen Einfluß auf das gegenwärtige religiöse Denken ausgeübt, der in keinem Verhältnis zu ihrem Umfang steht und der um so erstaunlicher ist, wenn man bedenkt, wieviel von diesem Denken Fragmentarisch ist.」。ベートゲは、ボンヘッファーのもとで学んだ人物で、後に彼の姪の夫となり、また戦後、キリスト教神学と反ユダヤ主義との関係を考察する作業を推し進めた。Bethge, Eberhard (1976) *Dietrich Bonhoeffer in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten*. Hamburg: Rowohlt. 宮田光雄・山崎和明訳 (2004) 『ディートリッヒ・ボンヘッファー』新教出版社

しなければなりません。

ただし、ボンヘッファーは単にナチスへの抵抗者としてのみ限定して考えるべき人物ではありません。現代的意味でもその存在が注目されているドイツの宗教者・神学者であります。ボンヘッファーの立ち位置を示す典型的な文言は次のことばです。彼の信仰のエッセンスと言えるでしょう。

Vor und mit Gott leben wir ohne Gott.

神の前で、神と共に、僕たちは神なしに生きる。

つまり、私たちは、この世の中で生きねばならない—たとえ神がいなくても—ということを経験することなしに、誠実であることはできない。しかも、僕たちがこのことを認識するのはまさに神の前においてである、というのです¹²。

12 ボンヘッファーの祈りに関する見方は例えば次の箇所にはっきりと見て取ることができる：

„Herr, lehre uns beten!“ So sprachen die Jünger zu Jesus. Sie bekannten damit, daß sie von sich aus nicht zu beten vermochten. Sie müssen es lernen. Beten-lernen, das klingt uns widerspruchsvoll. Entweder ist das Herz so übertoll, daß es von selbst zu beten anfängt, sagen wir, oder es wird nie beten lernen. Das ist aber ein gefährlicher Irrtum, der heute freilich weit in der Christenheit verbreitet ist, als könne das Herz von Natur aus beten. Wir verwechseln dann Wünschen, Hoffen, Seufzen, Klagen, Jubeln – das alles kann das Herz ja von sich aus – mit Beten. Damit aber verwechseln wir Erde und Himmel, Mensch und Gott. Beten heißt ja nicht einfach das Herz ausschütten, sondern es heißt, mit seinem erfüllten oder auch leeren Herzen den Weg zu Gott finden und mit ihm reden. Das kann kein Mensch von sich aus, dazu braucht er Jesus Christus. (Eberhard Bethge et al. hrsg., *Dietrich Bonhoeffer Werke*, Band 8: Widerstand und Ergebung, 「ボンヘッファー聖書研究（旧約編）」Chr. Kaiser Verlag 1998: 491-492)

「主よ、われらに祈ることを教えたまえ」（ルカ11：1）。こう弟子たちはイエスに言った。そう言うことによって、彼らは、祈りが自分たちからは不可能なことを告白した。彼らはそれを学ばねばならない。祈りを学ぶとは、矛盾した響きを私たちに感じさせる。心が満ち溢れて、おのずから祈り始めるか、さもなければ、祈りなど学びえないか、どちらかだと私たちは言う。しかし、心が自然に祈りうるという考えは、確かに今日広くキリスト教界に普及している危険な誤りである。そこで私たちは、願うこと・望むこと・呻くこと・訴えること・喜ぶこと—すべてそういうことは心のみならず心で—を、「祈ること」と混同する。そのことによって私たちは、地と天、人と神とを混同する。「祈る」とは、ただ単に心を注ぎ出すことではない。むしろその満たされたあるいは空虚な心で、神への道を見出すことであり、神と語ることである。だれもこのことを自分からすることはできない。そのために、イエス・キリストが必要とされるのである」。祈りとは神との交わりである。単に自分の思いを神に伝えることではない。

結果的に殺人という罪（＝ヒトラーを殺すこと）を犯すことはボンヘッファーのキリスト教理解とは矛盾しないのでしょうか。ヒトラーの排除を決意したボンヘッファーでしたが、独裁政権下で一切の反政府行動が禁じられているナチス・ドイツにあって、それは、すなわちヒトラー暗殺という非常手段を選択することにつながりました。暗殺という行為は、キリスト者にとって極めて重い決断であることは言うまでもありません。

そもそも戦争が神の御心であるはずがありません。戦争は人間のしわざです。戦争は人間の生命を破壊します。人間が戦争を止めなければならないのです¹³。折々の状況という文脈の中で神が何を望んでいるのかを知る必要があるわけです。ボンヘッファーに関してよく引用されるように、

„nicht nur die Opfer unter dem Rad verbinden, sondern dem Rad selbst in die Speichen fallen“

車に轆かれた犠牲者に包帯を巻いてやるだけでなく車そのものを停める。

という道を彼は選んだことになります¹⁴。ボンヘッファーは、キリスト者としてイエスの生き方に注目し、イエスの生き方に従って生きる決断をしたのです。ヒトラーに立ち向かうという「十字架」を背負ったと言ってもいいかもしれません。ボンヘッファーはイエス・キリストに服従しました。

そんなボンヘッファーも、1945年4月9日独裁者ヒトラーの暗殺計画に加担した容疑でナチスによりフロッセンビュルク（Flossenbürg, チェコとの国境沿い）強制収容所で処刑されました。ボンヘッファーはヒトラーの危険性を当初から見抜き、そのユダヤ人政策を批判し、最後には文字通り命を賭してナチスの暴走を止めようとなりました。ナチス以降もしくはホロコースト以降の世界で、ボンヘッファーにキリスト者として生きる1つのモデルが求められているのも何ら不思議なことではないでしょう。

13 1981年2月25日、広島で教皇ヨハネ・パウロ2世が発した『平和アピール』で「戦争は人間のしわざです。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死です」と述べられている。「過去を振り返ることは将来に対して責任を担うこと」とする趣旨である。

14 „Als Christ muss man nicht nur trösten, sondern auch eingreifen.“ 「キリスト者として人を慰めるのみならず実践的に踏み込むべきである」ということばで一般化されてしばしばキリスト教界で用いられる。



フロッセンビュルク強制収容所

4.

歴史的に見て、キリスト教は、戦争に関するスタンスという点で「絶対平和主義—正戦—聖戦」という揺れ幅を示してきたのも事実です。今日、正戦論の意味付けを考え直すべき時機に来ているように思われてなりません。「絶対平和主義—正戦—聖戦」という枠組みの中にあって正戦論は、どちらかという戦争を推進するための正当化の理論武装という面が強く感じられます。そうではなく、正戦論を、戦争を起さなくても済むための、人間ならではの知力を総結集した理詰めの理論と捉えることはできないでしょうか。

そもそもヨーロッパには正戦の前に聖戦の歴史があります。聖戦は『旧約聖書』に見られるような民族の神のために戦う戦争であるから妥協が許されない戦いです。ここで流された血潮をもとに、これを乗り越えるべく、ヨーロッパ文明は法倫理を編み出してきました。アウグスティヌスが、戦争という現実とキリスト教との原理的矛盾と格闘したのを皮切りに、ヨーロッパでは戦争を避けるべき基準として正戦論が論議されてきた長い道のりがあります。すなわち、目の前で起こっている戦争という暴力を最小限に食い止めるにはどうしたらよいかを考え抜いてきた議論の歴史です。いわばこうした極限状況から生まれてきたのが法律であり契約であります。ことばという知性でもって暴力を防ごうとし続けてきた姿勢にこそ、正戦論の本質を見るべきでしょう。

何らかの限界状況（Grenzfall）の中で愛のために罪責を引き受ける行為は、イエ

スの言動と重なるのではないのでしょうか。イエスが罪人として磔にされたことは言うまでもありません。キリスト者ならば、罪を負う必要のない者が敢えて罪を背負うという生き方（＝神の御心ではない戦争は人間のしわざであり、人間が戦争を止めようとする）がイエスに倣ったものであることは痛いほどわかることです。ボンヘッファーにとってのキリスト教とは、イエスそのものであり、他者のために幾多の苦難を引き受けながら勇敢にして行動的にかつ現実的に生きることがボンヘッファーにとって何よりも大切で尊いことであつたのであります。

平和主義との関連で語られることの多いボンヘッファーです。ヒトラー暗殺にためらいを見せなかった彼の思想を理解するためには、彼が敵を憎むことを重視したのではなく、敵を愛することを真剣に考え抜いた人物であることが大切であります。この苦悩と煩悩こそが、ボンヘッファーを独自の思想家・キリスト者にしていったと言ってもいいでしょう。この愛敵の思想は、キリスト教の宗教的特徴の一つであり、これほど徹底した博愛主義的な教えはもちろんボンヘッファーにも強い影響を及ぼしています。ボンヘッファーは、イエスの愛敵の戒めが「政治上の敵であれ、宗教上の敵であれ」及ぶものであることを示唆し、また「異なる種類の敵の間に何らの相違も認めるものではない」ことを指摘しています¹⁵。

ボンヘッファーは教会や大学に籠りきりの知識人ではありませんでした。世界各地で学び、国際的な視点からナチスの問題に向き合い、キリスト教の課題を考えていました。この間、ドイツにおけるナチスの支配はより強固になり、長引く不況の中、社会主義などの宗教否定の政治思想も広がりを見せていました。また、各国は来たるべき戦争の予感の中でも人種差別等は至るところで根を張り、地上に神の国を見出すことはとても困難な時代と言ってもいいでしょう。しかし、その中でも、彼はつねに希望に目を向け続けています。困難な状況にあっても（命の価値が賤しめられ、個人の良心が踏み躪られる時代の中にあっても）力強い希望へのまなざしをボンヘッファーはもち続けていたのです。希望へのまなざしは、彼の生涯を貫徹する姿勢でした。これは、彼が若々しい知識人として自由に世界を飛び回っていた頃のみならず、明日の命さえ保証されないナチスの獄中にあっても変わることはありませんでした。ボンヘッファーが晩年（1942年クリスマス）書き残した証言に認められるのは決して捨て鉢な絶望の色調ではありませんでした。戦後のドイツの再興に向けられた「よりよ

15 悪に対抗して相手に悪を行うのではなく、忍耐して付き合い、真理をもって説きなさい、すなわち、愛に暴力はないので、相手に合わせ、過ちから出て来るようにしてあげなさい、という教えである。「左の頬をも向けよ」という一見消極的な無抵抗の姿勢の背後に、誰に対しても溢れるように与えてやまない積極的な恩恵の世界の生き方がある。

い将来」へのまなざしでした（次のテキスト）¹⁶。

Es gibt Menschen, die es für unernst, Christen, die es für unfrohm halten, auf eine bessere irdische Zukunft zu hoffen und sich auf sie vorzubereiten. Sie glauben an das Chaos, die Unordnung, die Katastrophe als den Sinn des gegenwärtigen Geschehens und entziehen sich in Resignation oder frommer Weltflucht der Verantwortung für das Weiterleben, für den neuen Aufbau, für die kommenden Geschlechter. Mag sein, daß der jüngste Tag morgen anbricht, dann wollen wir gern die Arbeit für eine bessere Zukunft aus der Hand legen, vorher aber nicht.

この世界のよりよい将来を希望し、またそのために準備することを不真面目だと考える人々や、それを不信仰と考えるキリスト者がいる。彼らは、混沌・無秩序・破局を現在、起こっている出来事の意味であると信じ、諦めや敬虔な世界逃避の中で、生の継続、新しい建設、来るべき世代に対する責任から逃れている。最後の審判の日は、明日にも突然やって来るかもしれない。その時には、私たちは、よりよい将来のための労働を喜んで放棄してもよい。だが、それ以前には、そうはすまい。

戦争に反対し抵抗した神学者ボンヘッファーにしても、当時の時代状況にあって、あれだけの勇気を持ち得たのはやはり奇跡的だとも言えるでしょう。彼はナチ政権に無批判な圧倒的多数のドイツ人の中で、怒りや孤独感に苦しむことはなかったのでしょうか。私たちも自分自身がその立場にあったらどうしていたのでしょうか。あの時代のドイツにいたら沈黙に逃げ込んでしまうことはなかったのでしょうか。こう考えると、ボンヘッファーや彼の仲間たちの存在・活動が今日の私たちにとっていかに示唆的なものかがわかります。

5.

ボンヘッファーは拙速にヒトラーの暗殺を支持したわけではありません。彼には愛敵の思想が関わっていたことは間違いありません¹⁷。敵を愛するためには、まずその

16 ベートゲ（2004：159）

17 ナチスの時代に愛敵の思想は成り立ち得るのか、あるいは妥当なのか、妥当だとしても、ボン

敵を赦すことから始めなければならない、愛に先だって赦しが来る、相手の罪を赦すわけです。ここからしか敵への愛は生まれません。これは、イエスの十字架の罪の赦しによるほかはありません。ゆえに、このような愛敵の思想は、神からの罪の赦しの恩寵・恵みに由来するものです。イエスのいう愛敵は「私たちが他者の罪を赦したように私たちの罪をもお赦し下さい」という「主の祈り」へとつながります。マタイの「山上の垂訓」の教えは「主の祈り」が中心です。このようにしてボンヘッファーは、信仰によって、自らにどんなことが起こっても耐えられるという心情にあったことは確かでしょう。

愛敵(敵を愛すること)は聖霊から来るものです。ボンヘッファーも祈りを通して、深い煩惱と検討の果てに苦渋の決断をしたのです。決してヒトラー暗殺のためらいを見せなかったと伝えられる彼の思想を理解するためには、彼が敵を憎むことを重視したのではなく、敵を愛することを真剣に考え抜いた人物であることが大切です。この苦悩と煩惱こそが、ボンヘッファーを独自の思想家・キリスト者にしていったと言ってもいいでしょう。

イエスは、自分自身のように隣人を愛せよという戒めを、心を尽くし力を尽くして主なる神を愛することと一体の戒めとしています。悪に対抗して相手に悪を行うのではなく、忍耐して付き合い、真理をもって説きなさい、すなわち、愛に暴力はないので、相手に合わせ、過ちから出て来るようにしてあげなさい、という教えであります。「左の頬をも向けよ」という一見消極的な無抵抗の姿勢の背後に、誰に対しても溢れるように与えてやまない積極的な恩恵の世界の生き方が示されています¹⁸。

ヘッファーの行動原理に合致するののかという疑問が生じる。根本的に、そもそも戦争は人間のしわざであり、神の御心であるはずがなく、生命を破壊する戦争を人間が止めなければならないという発想のもと、緊急の事態に立ち向かおうとしたのだと考えられる。

- 18 キリスト教のこの「愛敵」の教えをボンヘッファーはとて重視したのである。今日、ボンヘッファーはナチスへの抵抗者として記憶されているが、彼のその行動を支えたのは敵への憎しみではなく「愛」であったのである。キリスト者として生きることを選んだボンヘッファーの思想は私たちにとって永遠の倫理的課題であると言っても過言ではない。